

なぜロックマン財団はウェストコットとホートを支持したのか？

I.

(1)

ウェストコットとホートの底本による翻訳聖書を多数出し、日本の新改訳聖書の出版に多額の資金を提供したロックマン財団のトップ、デューイ・ロックマンは、フリー・メイソンである。ロックマン財団のホームページに載っている。

デューイ・ロックマンは、有名な地方の指導者で、博愛主義者でもあった。彼は、ギデオン協会で31年間活動し、フリーメイソンのメンバーであった。

<http://www.lockman.org/tlf/tlfhistory.php>

フリーメイソンなら、なぜこれだけウェストコットとホートにこだわったのかなぞが氷解する。

そして、フリーメイソンは実質イルミナティに乗っ取られているから、イルミナティだ。

(2)

このウェストコットとホート底本に基づく現代語訳聖書は、主に二つの写本に基づいている。

1. シナイ写本 (Codex Sinaiticus)。これは、1844年にシナイ山のほとりにあるセント・カタリナ修道院でコンスタンチン・フォン・ツィンツェンドルフによって発見され、1859年まで修復された。

2. バチカン写本 (Codex Vaticanus)。これは、19世紀後半にバチカン図書館から突如「現れた」。しかし、何年もの間、バチカンは、非カトリックの学者がそれを精査することを禁止した。

ローマ・カトリックは、聖書を各国語に訳すことを禁じた歴史がある以上、彼らの写本を使うことはいかなるものだろうか。

教会において歴史上ずっと間使用され、メジャーな位置を占め続けてきた写本を退けて、このように最近発見されたものだとか、神の言葉を妨げるローマ・カトリックがしぶしぶ出してきた写本を使うことのどこに正当性があるのだろうか。

とにかく、「2000年間もの間、神が御言葉を契約の民に知らせてこなかった」という考えそのものが、アウトだ。

(3)

どうも私は、このウェストコットとホートの「新発見」写本と、最近の「ダビンチコード」ブームとがかぶるのだ。

どちらも「今まで教会が知らなかったものが発見された！」である。

どちらも、フリーメイソン＝イルミナティの「仕掛け」であると感じるのは私だけだろうか。

II.

悪魔の影響は本当に強い。ここ150年間はとくに、キリスト教界全体がすっかり騙されてきました。

ロックマン財団がフリーメイソンだったという情報はきわめて重要であり、福音派がロックマン財団の影響を徹底して受けてきたということは、福音派はフリーメイソンだったということに等しい。

お気づきのこととは思いますが、私たちが置かれている状況は、きわめて危機的です。

2つの騙しから大至急回復する必要があります。

- (1) ウェストコットとホートの聖書を捨てて、ビザンチン写本から訳すること。
- (2) ディスペンセーションナリズムのプレ・ミレを捨てて、ポスト・ミレを採用すること。

以前お問い合わせがあった、N牧師は、プレ・ミレを強烈に宣伝する人です。

彼はTV伝道をしており、プレ・ミレ終末論を強力にといてきました。

だいたい福音派の牧師は「世界の終末が近い」と説くようになっています。これこそ、ロックマン財団の目指していたところでした。

III.

新改訳聖書は、ロックマン財団との間に訴訟があった。

<http://njlabo.sakura.ne.jp/seisho.or.jp/shinkaiyaku/00007ssk/shimei/>

ロックマンが総必要額の46%を献金したことから、著作権を主張したからであった。

実は、新改訳聖書の翻訳に際して多額の（総必要額の46%）献金をして下さった（1966年8月で献金は停止）ロックマン財団の責任者が代替わりしたときに、財団は新改訳聖書の著作権がロックマン側にあるとの理解に立って、アメリカで、TEAM 宣教団体に対して訴訟を起こしました。

ロックマンは、どうやら日本における出版差し止めすら求めたようだ。

その訴訟は退けられましたが、それとの関連で、日本では、新改

訳聖書がロックマン財団が出版していた NASB 英語訳からの翻訳ではなく、ヘブル語・ギリシャ語原典からの翻訳であること、それゆえ著作権は日本人翻訳者側にあることを確認して欲しいと裁判所に訴えなければならぬ事態が生じました。

それで、翻訳者側を代表して舟喜先生が多大な時間と労力を使って、新改訳聖書が日本で出版差し止めにならないように、TEAM 側と協力して、献身的に努力して下さったのです。

ロックマンが新改訳に献金した目的は、NASB の日本語版を作ることにあったのだろう。

発行に際して新アメリカ標準訳聖書 (NASB) を発行する米国ロックマン財団 (The Lockman Foundation) の財政的支援を受け、翻訳方針も NASB を踏襲するものであった。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%94%B9%E8%A8%B3%E8%81%96%E6%9B%B8>

しかし、NASB は、底本がネストレであり、ウェストコットとホートの理論に従っているため、使用写本はバチカンとシナイである。

それに、その翻訳の責任を負っていたログズドン博士が、内容があまりにも削除が多いため、悔い改めをしている。

<http://tak0719.web.infoseek.co.jp/qanda3/60ZjqDVGwldzY52665.htm>

その悔い改めの手紙をデューイ・ロックマンに出したが変化がない。ということは、ロックマンは、虫食いだらけの聖書を日本に流行らせたかったということだろう。

新改訳の問題をこじらせたのは、当時責任者であったいのちのことば社のケネス・マクヴィティ氏が、翻訳担当者との協議なしに、著作権契約を結んでしまったことにある。

事を非常に複雑にしていた要因に、当初、新改訳聖書委員会の議長 K. マクヴィティ氏（後に新改訳聖書刊行会の委員長）が上記の宣教団体の事業部門である出版社側の代表でもあり、同時にロックマン側のパイプ役を務めていたということがあります。

三つのグループ（翻訳者・出版社・財団）の責任ある役割を兼務しているうちに、必ずしも悪意ではなかったのですが、著作権の法的知識に乏しかったために、その方は間違った契約を結んでしまったのです。

マクヴィティ氏について「必ずしも悪意ではなかった」と断り書きをしているが、氏の会社であるいのちのことば社は、ハル・リンゼイの「地球最後の日」やティム・ラヘイの「レフト・ビハインド」を出版しており、プレ・ミレを流行らそうとの意図は明らかだ。

その点で、「我々は、イエス・キリストの…前千年王国説的再臨を信じる」と公言するロックマンと一致している。

<http://www.lockman.org/tlf/tlfabout.php>

ロックマンの多額の献金の目的は、新改訳を「プレ・ミレを信じやすくするウェストコットとホートの聖書」である日本語版 NASB にし、それを福音派に流行らせ、福音派のクリスチャンの頭を「切迫終末論」で占領することにあつたと考えるのが妥当だと思う。

日本人の翻訳担当者は、ギリシャ語やヘブル語から真摯に訳したと思うが、しかし、その取りまとめ役を務めた人、資金を提供した人々が、そういう真摯な意図とは別の計画を持っていたのだろう。

いずれにしても、デューイ・ロックマンがフリーメイソンであることを公言するロックマン財団が隠し持っているフリーメイソンの計画によって、新改訳聖書は作られており、福音派のクリスチャンは、この聖書とプレ・ミレによって骨抜きにされ、彼らの計画を妨害しない「おとなしい羊」言い換えれば「塩気のない塩」になりさがったということなのだろう。

